

災害時の常備薬のスムーズな提供を目指して

宮城県仙台第三高等学校 普通科

要旨

普通科探究 35 班は、近年の避難所生活の長期化に伴い、避難者の QOL 向上に向けて探究活動を始めた。調査の過程で避難所での医薬品の提供に時間がかかるという課題を見つけた。医薬品のスムーズな提供にはお薬手帳が役立つが、ほとんどの人はお薬手帳を常に持ち運ぶ習慣がない。そこで持ち運びをスムーズにするため、お薬手帳をカード型に改良する案を出した。仙台市役所健康福祉局によると、避難所での医薬品の提供は医師の診断の元で行われるとのこと。そこで、私達は周囲に持病があることを知らせ、優先的に医師の診察を受けられるようにするシステムとしてのお薬手帳やお薬カードのさらなる普及を提案する。

1 背景と目的

近年日本では、東日本大震災や能登半島地震など、大災害の発生が相次いでおり、それに伴って、避難所生活の長期化が課題になっている。長期間にわたる避難所生活では、生活必需品や医薬品の配給が滞ってしまうことが多い。実際に、2011 年に発生した東日本大震災では、避難所生活は半年以上にも及び、医薬品の提供状況に不安の声が上がった。避難者が普段服用している医薬品を提供するためには、正確な種類や成分の把握が必要になる。そこで役立つのが「お薬手帳」である。しかし、お薬手帳を普段から持ち運ぶ人の割合は極端に少なく、システムの改良が必要だと考えた。

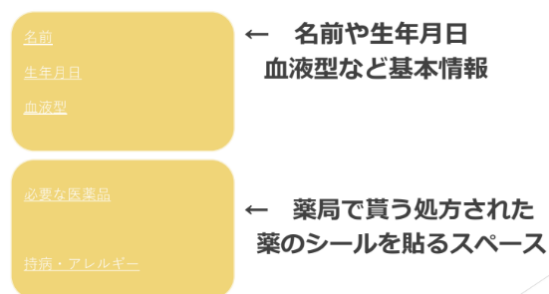
お薬手帳を持ち運ぶ習慣が無い原因の一つとして、お薬手帳の持ち運びにくさが挙げられる。そこで、私達はお薬手帳の持ち運びにくさを解消するための探究を始めた。

(日本調剤調べ 2014 年)

	回答者数	%
TOTAL	1095	100.0
ついつい持っていくのを忘れる	623	56.9
冊子なので持ち歩くとかさばる	435	39.7
紛失すると自分の服用情報を失ってしまうことになる	209	19.1
紙の書類なのでデータとしてPCなどで活用できない	136	12.4
複数の薬局にかかるとその分だけ手帳が増えてしまう	109	10.0
自分の個人情報になるので持ち歩きたくない	86	7.9
その他	19	1.7
特になし	194	17.7

現在、このようなお薬手帳における課題を解決するため、スマートフォンなど各種電子機器を用いたアプリケーションの開発が進められており、ぜひ普及を促進させていきたいと感じる。しかし、今回のように災害時に避難所での活用を視野に入れた場合、災害時は電源の調達や機器の状態に不具合が生じるケースが多く、なるべく電子機器を用いた解決策の提案は避けたいところである。また、お薬手帳のユーザーの年齢層は広く、高齢者には携帯電話などの電子機器のスムーズな利用が困難な場合が予想される。デジタル化が進んでいる今日であるが、私達は災害時や高齢者の使用時の利便性を考慮し、紙媒体でのお薬手帳を更に使いやすくすることを目的とした。

お薬手帳の大きな課題として挙げられるのは、持ち運びに不向きで、利用者の中で持ち運ぶ習慣がなかなかつきづらいということである。そこで私達は、従来のお薬手帳をカード型にし、携帯しやすくするという解決案を考えた。このカード(以下おくすりカードとする)には、調剤薬局で処方箋受付時に渡されるシールを貼り、更に利用者のデータを記入した状態で、携帯電話のカバーや財布に入れ、持ち運ぶことを目的としている。



(おくすりカード使用例)

3 外部インタビューより

私達は、おくすりカードのさらなる活用を目指して、令和六年十月十七日に仙台市役所健康福祉局保健衛生部医療対策課を訪問した。インタビューの結果、避難所で直接避難者に医薬品を提供するという事例はほとんどなく、実際は避難者が医師の診察を受け、処方箋を受け取った状態で医薬品を受け取るという動きになるということが分かった。

外部インタビューから、医薬品を直接提供するためのおくすりカードから、目的を変更し、避難者が持病があることを周りに伝えやすくすることを目的としたおくすりカードのあり方を目指して探究活動を進め

た。実際に避難所で避難者の健康管理に直接携わるのは行政保健師なので、避難所において避難者の体調が悪化した場合におくすりカードを行政保健師に提示することで、医師の診察を受けるまでの時間を短縮できるのではないかと考える。

4 結論・考察

今回の調査で分かったことは、お薬手帳は持ち運びに不便なので、もっと使いやすく持ち運びしやすいお薬手帳に代わる新しいシステムの導入が必要であることである。新しいシステムの提案、導入により、災害時の避難所生活における医療保健の質は更に向上させることができると感じる。

私達の提案するおくすりカードをより実用的にするために、以下の二つの課題の解決が必要である。

- ・情報の更新のしかた
- ・記載可能な情報の量について

まず、従来のお薬手帳とおくすりカードとの大きな相違点としては、おくすりカードに記載できる情報が大幅に限られることが挙げられ、おくすりカードの運営については常に最新の病歴が記載されていることを前提としている。そのため、新たな処方を受けた場合はそれまで使用していたおくすりカードに上書きをする形で情報の更新を行う想定をしている。具体的にはおくすりカードに貼るシールを新しいものに張替え、引き続き使用するという形を取るという案があるが、手間がかかり、あまり効率的ではないという問題点がある。加えて、お薬手帳は、今までの病歴や服薬歴といった情報の提供という役割も担うのに対し、おくすりカードはそういった大量の情報の記載が難しいというデメリットも考えられる。このようなおくすりカードが抱える課題を考慮した結果、現在普及している従来のお薬手帳を持ち運びしやすくするという方向から、お薬手帳を持ち運ぶ習慣がないという課題の解決を図るという手段についても考えた。具体的な案としては、お薬手帳の発行の際にカバーをつけ、診察券と一緒に保管し携帯を促す、という策や、お薬手帳の持ち運びの重要性についてポスターなどを制作し広報活動を行う、という策が考えられる。

災害時のお薬手帳の重要性に関しては、未だ理解が広まっておらず、まず「お薬手帳は常に携帯しておく価値のあるものだ」という認識を社会に広めていくことが大切であると感じた。お薬手帳に代わる新しいシステムの導入を進めることはいずれは必要になるが、まずは従来のお薬手帳のポテンシャルをフルに活用できるような知識や体制を整えていくことで、避難所でも、質の高い医療を地域住民へ提供することができるのではないだろうか。

参考文献

- ・HP「お薬帳に関する調査 日本調剤2014年」

- ・ HP「東日本大震災における診療活動の問題点と新たな災害対策の提言」
- ・ HP「知っておきたい、災害に役立つ常備
abstract

Big disasters make it longer to be in shelter. I think we need to think again about how to provide medicines in shelters to live comfortably. To provide medicine smoothly, it is effective to bring an “Okusuritetyo”. However, people do not have the habit of bringing okusuritetyo. Our team thinks it is important to be compact to bring it easily. Its name is “Okusuri Card”. But spreading our new type of Okusuritetyo is difficult. We also have to think about how to use originally Okusuritetyo effectively.